をしけるこそ、あはれにみえけれ、そのあしたひじりたちあつまりて、こはいかにと申しあひければ、かくぞながめける、

世をすつる人はまことにすつるかはすてぬ人こそすつるなりけれ○略中

今は山林流浪の行をとげんと思て、はじめのいでたちこそあはれなれ、○略中としごろおもひし事なれば、まづ吉野山をたづねて、花をこゝろにまかせて、みんとて、たづねけれども、おなじこゝろおもふ人もみえざりければ、

たれかまた花をたづねて吉の山こけふみわけていはづたふらん、○略中名をえたるやまの花なれば、さこそおもしろかりけめ、こけのむしろのうへ、いはねにまくらをかたぶけ、さすがに、いけるいのちのたよりには、たにのしみづをむすび、みねのこのはをひろいて、寂寞莫人聲讀誦此經典とよみ、入於深山思惟佛道のをこなひ、こゝろにあかねども、熊野のかたさまへまいらんと、おもひたちて、ゆくみち〳〵のありさま、いとゞあはれのみまさりぬ、○略下

〔台記〕康治元年三月十五日戊申、西行法師來云、依行一品經、兩院以下、貴所皆下給也、不嫌料紙美惡、只可用自筆、余○藤原頼長不輕承諾、又余問年、答曰、廿五、去々年出家、廿三、抑西行者、本兵衛尉義清也、左衛門大夫康清子以重代勇士仕法皇、自俗時入心於佛道、家富年若、心無憂、遂以遁世、人歎美之也、

〔方丈記〕我身○鴨長明父かたの祖母の家を傳へて、久しく彼所にすむ、その後緣かけ、身おとろへて、忍ぶかたゞ〳〵なげかりしかば、つゐにあとゝむる事を得ずして、三十餘にして、更に我心と一の庵を結ぶ是をありし住居になずらふるに、十分が一なり、たゞ居屋ばかりをかまへて、はかゞ〳〵しくは、屋を作るに及ばず、わづかにつひぢをつけりといへども、門たつるにたづきなし、竹を柱として、車やどりとせり、雪ふり風吹毎に、あやうからずしもあらず、所は川原ちかければ、水の難もふかく、白波の恐もさはがしすべてあられぬ世をねんじ過しつゝ、心をなやませる事は、三十餘